

東方2次創作集

ウエストモール

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

衝動的に書いた東方2次創作を放り込んでいく所です

一覧

- ・バルタン星人が幻想入り（没）
- ・東方模造巨人 2話
- ・東方超越戦士（改変前）

目次

宇宙人達の幻想入り

バルタン星人が幻想入り(没)

1

東方模造巨人く幻想郷の黒き戦士く

東方模造巨人(1)

—————

11

東方模造巨人(2)

—————

18

東方超越戦士(改変前)

東方超越戦士 1話(改変前)

28

宇宙人達の幻想入り

バルタン星人が幻想入り（没）

ここは、M78星雲や銀河系が存在する宇宙だ。その宇宙の片隅を人間と同じ大きさの何かが漂流していた。

それを見た者は、口々に「セミのようだ」とか「エビかカニみたいだ」と言い、甲殻類や昆虫を想像する。その正体は宇宙忍者と呼ばれるバルタン星人であり、宇宙人の中でも有名な存在だ。

拙者の名はウツセミ、バルタン星人の1人だ。何故拙者が宇宙を漂流しているのか、それは先ほどウルトラマンに敗北したからである。ウルトラマンと戦った経緯は、数十年前に遡る。

数十年前、故郷のバルタン星は核実験によって壊滅し、たまたま宇宙旅行をしていたことで生き残った20億人は宇宙を放浪、最終的に地球へ移住しようとしたところ、地球人との交渉が決裂し、同族の1人がウルトラマンと戦って殺された。さすがに移民船の民は見逃されると思っていたのだが、予想に反してウルトラマンは移民船を全て破壊、生き残ったのは拙者を含めて脱出できた者だけであった。

「息子よ、早く脱出するのだ」

「お待ちください、父上は？」

「全員が脱出する時間はない。ウツセミよ、お前だけでも生き残れ！お前はまだ若い、長い時間をかけて力を蓄え、ウルトラマンを倒すのだ！」

脱出した拙者の目に写ったのは、爆発炎上する移民船の数々。拙者からすれば、ウルトラマンは悪魔そのものであった。やがて、生き残りと再会した拙者は傭兵として戦闘経験を重ねつつ自身を改造して高い能力を得た。それから数年経ち、拙者は戦闘形態に変身してウルトラマンに戦いを挑むことになったのだが、奴の八つ裂き光輪で四肢と頭部を切断されて敗北した。

そのまま放置されて宇宙を漂流することになった拙者は切断されたパーツを胴体に繋ぎなおし、エネルギーの消耗を減らすために人間大に小型化した。しかし、それでも大幅に体力を失っていた拙者は、腹部に出来ていた傷を治すことができず、黒い血が少しずつ流出していたのだ。

少なくとも長くは持たないだろう。このままでは宇宙の藻屑だが、別に拙者は後悔していない。あの憎いウルトラマンと一戦交えることができたのだから。そして、負けて理解したのだ、力無き者は蹂躪されるということ、バルタンは力無き者の側にあるというところ。

やがて、拙者は考えることをやめた。

筈だった・・・

「ん？」

漂流する自分の目の前に突如として現れた空間の割れ目。その内部には目玉のような模様が多く浮かんでおり、禍々しい空間であった。精神の弱い者であれば、発狂するだろう。この空間の正体は分からないが、これから死ぬ拙者には関係ないことだ。

拙者は、その空間に吸い寄せられていく。体力が消耗していることもあり、抵抗は出来なかった。そして、完全に吸い込まれたとき、拙者は意識を失った。

「宇宙人さん、ようこそ幻想郷へ」

スキマの中に、女性の声が響いた。

「異常無し」

妖怪の山の白狼天狗の一人、犬走権はいつも通り警備をしていた。

「そろそろ交代……ん？」

千里先まで見通す程度の能力で周囲を見渡していた彼女の目に、何かが映る。

「あれは……人間が倒れている？」

彼女はその人間の所まで走っていき、その存在を確かめる。それは人間の男性で、外來のものらしき銀色の服を着ていた。

「外来人？この匂いは……」

白狼天狗は元が狼であるため、鼻が利く。匂いで相手が人間か妖怪か判断できるのであるが、その男の匂いは人間のものでも妖怪のものでもなかった。

「どうしよう……」

山に迷いこんだ外来人を発見したら人里まで送っていくという慣習はあるものの、相

手は人間ではない。他の選択肢は、そのまま放置して山の妖怪に任せる、とりあえず捕縛する、山や幻想郷に危害を加える前に殺す、の3択だ。

「……………」

しばらく思索した後、椀は1つの結論を出した。それは、彼を白狼天狗の詰所に収容し、目を覚まし次第、侵入者として取り調べを行うことだ。これが、白狼天狗の犬走椀とバルタン星人のウツセミの最初の出会いであった。

「知らない天井だ」

拙者は目を覚ました。布団に寝かされており、天井は木造なのが分かる。そして、自分の身体の状況を見て驚いた。

「人間の手だど?」

よく見ると、自分の手が地球人と同じものになっていた。そういえば、古代のバルタン星人は地球人と変わらない見た目をしていたし、今でも人間に変身できる者もいるらしい。もしかしたら、瀕死になったことで人間に変わる能力が発現したのかもしれない

い。

「目を覚ましたようですね」

引き戸が開き、獣の耳を付けた白髪の少女が入ってくる。背部には剣を背負っており、戦闘要員であると推測できる。

「あなたは外来人で間違いないですか？」

外来人とは、外から来た人ということだろう。では、ここは外部とほぼ関わりのない土地なのだろうか？

「外来人？そもそもここは何処でござるか？」

「ここは、幻想郷です」

この後続いた説明によると、ここは地球の中に存在する幻想郷という土地であり、外界で忘れられた物が流れ込むとのことだ。そして、外界から迷いこんできた人を外来人と呼ぶらしい。

「あなたはどのように幻想郷に来ましたか？」

「たしか・・・変な空間の割れ目を通ったはずでござる。その中には目玉のようなものが浮かんでいました」

「ああ、あのスキマ妖怪の仕業ですね」

また新たな単語が出てくる。妖怪の存在は地球から密輸された書物で知っていたが、

スキマ妖怪なる名前を知らない。

「スキマ妖怪？」

「幻想郷を創った大妖怪です。時々、外部の人間を幻想郷に拐うことがあるそうで」

そいつの仕業で確定のようだ。

「もう一つ聞きたいのですが、あなたは何者ですか？あなたからは人間の匂いも妖怪の匂いもしない。白狼天狗は鼻が利くので分かるんですよ」

ハクロウ天狗という種族は鼻が利くらしい。そうか、匂いでバレることがあるのか……

「正確に言えば、拙者は宇宙人と呼ばれる存在でござる」

「なるほど、宇宙人……え？もしかして月から来たんですか？」

どうやら、幻想郷にも宇宙人という概念はあるらしい。しかし、月か……幻想郷の月にも怪獣はいるのだろうか？

「いや、拙者はバルタン星出身のバルタン星人でござる」

あれから1週間経ち、体力も回復した拙者は天狗達を統べる天魔という存在に呼び出されていた。権殿によると、取り調べの内容を見て拙者に興味を抱いたらしい。

「ウツセミ殿、この先に天魔様がいらっしやいます。無礼のないように」

「承知した、権殿」

やがて、引き戸の両側に待機している鴉天狗が戸を開くと、奥の1段上がった所に座っている天魔と思われる天狗や、部屋の横で待機している側近の天狗が3人程いるのが見え、入った拙者は正座する。

「面を上げよ」

拙者の正面に大きな黒い翼のある天魔はそう言った。言われるままに拙者はそのまま顔を上げる。

「名はなんと申すか？」

「拙者はウツセミと申します」

「どうやら、拙者の名前までは報告に上がっていないらしい。

「ではウツセミよ、そなたは取り調べに際して自らを宇宙人と名乗ったそうじゃな」

「はい」

「我はそなたに興味を持った。今この場で宇宙人である証拠を示してみせよ」

「ここまででは予想通り。体力も回復したため、身体を変える能力も完全だ。
「では、お見せします」

立ち上がった拙者は目をつぶる。すると、自身の隣にバルタン星人としてのシルエツトが出現し、拙者の人間体と重なった。

「これが、拙者のバルタン星人としての姿でございます」

「なんと面妖な……！」

その場にいる天魔や側近の天狗、後方に控えていた檜殿の視線が拙者に集まる。

「天魔様！こやつは危険です！」

「宇宙人かどうかも怪しいものです！」

側近のうち2人……側近AとBはいきなり声を上げる。だが、これも予想通りだ。

「気に入ったぞ、ウツセミよ」

「はっ！」

先ほどの側近ABだけでなく、側近Cも驚きの声を上げる。

「そなたを、妖怪の山の一員として迎え入れよう。妖怪の山は排他的な土地ではあるが、たまには刺激も必要だからな。それに、宇宙の話も聞きたい」

「拙者のような怪しい者を入れて大丈夫なのですか？」

「そもそも、妖怪自体が怪しい存在だ。宇宙人が来たぐらいで問題はなからう。ただ、側

近が五月蠅いのでな、そなたには監視役兼幻想郷の案内人として、その犬走棍を付けさせてもらう」

こうして、妖怪の山の一員として一応は迎え入れられた。拙者はこの世界を新たな故郷とし、脅威が迫れば幻想郷という居場所を守るつもりだ。

東方模造巨人く幻想郷の黒き戦士く

東方模造巨人（1）

ここは何処だ？

目を覚ますと、回りには岩石が転がった茶色の空間が広がっており、頭上に空いている縦穴からは太陽の光が差していた。

とりあえず、地底であることが分かる。ただし、そんなことよりも重要な事実がある。

「俺は、死んだはずだ……」

俺、ダークザギはノアとの必殺光線の撃ち合いで敗北し、そのまま木っ端微塵に砕け散った。しかし、俺は生きている。

さらに、水溜まりに映った自分を見ると、自分が人間の青年になっていることが分かる。

続いて黒い上着のポケットに手を突っ込むと、何かが入っていることに気付く。取り出してみると、それは黒いエボルトラスターと銃のような武器だ。黒いエボルトラスターはダークトラスターと呼ぶことにしよう。

黒いエボルトラスターの存在で確信した。俺が人間の姿でここへと来てしまったの

は、ウルトラマンノアの仕業であることを。

ノアめ、俺を完全に消滅させていけばよかったものを、よく生かしたものだ。せめて、俺を生かしたことを後悔しないことだな。

「ねえ、その人間のお兄ちゃん。どうしてこんな所にいるの？」

突っ立っていたところに突然かけられる声。後ろに向き直ると、そこには閉じた瞳のようなアクセサリー？を着けた銀髪の少女が立っていた。気配から察するに、ヒトではないのは確かだ。

「気付いたら迷い混んでいただけだ。そもそも、お前は誰なんだ？」

「私は妖怪の古明地こいしだよ。お兄ちゃんは外来人なの？」

こいしと名乗るこの少女、怪しい奴に対する警戒心が薄すぎじゃないか？それに、外来人とはなんのことだ？

「外来人？」

「その言葉にピンと来ないってことは、お兄ちゃんは外来人だね。外来人っていうのは、外の世界から幻想郷に迷いこんできた人のことだよ」

とにかく、俺は幻想郷と呼ばれる場所に来てしまったようだ。さらに説明を聞いたのだが、幻想郷には妖怪や神が住んでいるらしい。

いつか、神とやらに会ってみたいものだ。

「お兄ちゃん、家無いでしょ？」

「来たばかりだからな」

「恥ずかしいことだが、かつて暗黒破壊神として恐れられたこのダークザギが、絶賛ホームレス中なのだ。」

「私の家に来てよ」

有無を言わず掴まれる左手。俺は少女とは思えない程の力で引っ張られた。これが妖怪の力というわけか。

「そういえば、お兄ちゃんの名前聞いてなかったね」

「俺はザギだ」

「よろしくね、ザギお兄ちゃん」

これが、かつて暗黒破壊神と呼ばれた者と幻想郷住民とのファーストコンタクトであった。

やがて、2人が辿り着いたのは、西洋風の大きい屋敷だった。

「ここが私の家、地霊殿だよ」

「ふん、こんな建物が地底にあるとはな」

こいしは再び俺の手を掴むと、扉を開けて俺を屋敷の中に引つ張り込んだ。

「お姉ちゃんただいま！外来人見つけたから連れてきたよ！」

「おかえりなさい、こいし」

すぐ目の前にピンクの髪の少女がいた。頭にはヘアバンドを着けていて、そこから伸びるコードの先には第3の目があった。

最初、彼女はザギを見て何故か驚いたような表情をしていたが、我に返って自己紹介をした。

「私は古明地さととり、あなたは・・・？」

「ああ、俺の名は・・・」

「ザギさんですね」

は？俺はまだ名乗っていない筈だ・・・何故、名前が分かったんだ？

「どうして俺の名を？」

「私の能力です。私は相手の心を読むことが出来ます。ただ、あなたに関しては名前く

らしいか読み取れませんでした」

「心を読む力か、面白い」

危ない危ない。仮に心を完全に読まれていたら、今までのことが全てバレるところだった。

「ではザギさん、しばらく地霊殿に泊まっていつててください。あ、その前に他の住人を紹介します。2人とも、出てきてください」

すると、赤髪の猫耳女と黒髪の翼を生やした女が現れた。

「あたいは火焰猫燐、火車の妖怪さ。名前が長いから、お燐と呼んで」

「私は霊鳥路空、地獄鴉の妖怪だよ。みんなからはお空って呼ばれてるんだ」

こいつらも妖怪か。

「よろしく頼む」

「それじゃあザギお兄ちゃん、私が地霊殿を案内してあげるよ」

ザギは、再びこいしに引つ張られていった。

「行きましたね。お燐、ちょっと彼に関するお話が。私の部屋に来てください」

ザギがこいしに引つ張られていったのを見て、さとりはお燐と共に自室へと戻った。「彼から一体何を讀み取ったんですか？」

さとりを少し間をおいて話し始める。

「実を言おうと、彼の心の中はほとんど闇で塗りつぶされていました」

「闇？」

「そうです。そして、その闇には様々な感情が含まれていました。劣等感、嫉妬、怒り、失望、渴望、その他諸々、殆どが善とは言えない感情です」

さとりとお燐の額を、汗が伝った。

「それってマズイのでは？」

「完全に悪と決まった訳ではありません。私は見ました、心の闇の中に光る一筋の光を。しかし、彼がどう転ぶか未知数です。お燐、彼の監視をお願いします。場合によっては……」

「殺す……？」

ザギを殺す。それは、さとりが最も避けたい事態だった。彼はこいしに気に入られているように見える。もしも彼を殺せば、こいしは傷つくだろう。

かつて、覚り妖怪として迫害されていた時のように、また傷ついて欲しくなかった。

「できれば、そんなことはしたくないものです」

幻想の地、幻想郷に辿り着いた暗黒破壊神ダークザギ。彼はここで何を為すのか？何を
を得るのか？それは、まだ分からない。

東方模造巨人（2）

俺は、地霊殿の中で本のある部屋を見つけ、幻想郷に関する資料を読み漁っていた。

「なるほど、これが幻想郷か」

幻想郷は二重の結界に覆われており、外界から隔てられているため、俺の縄張りにつきそうだ。

ただ、実際に幻想郷を見て回らなければ、縄張りを守ることができない。それに、俺に内包されている力を危険視した誰かに狙われる可能性があるため、各勢力を見ておく必要がある。

「とにかく、地上に出る必要があるな」

そして俺は椅子から立ち上がる。

その時だった。

ドクン・・・ドクン・・・

いきなり、ポケットに入れていたダークトラスターが明滅し、心臓の鼓動のような音

を鳴らす。

「まさか、スペースビースト・・・？」

とはいっても、ビースト振動波は感じられない。だが、何か地底に近づいているの
だろう。

やがて、地霊殿が大きく揺れる。揺れが収まってから扉を開けると、そこにはこいし
が立っていた。

「お兄ちゃん大変だよ！」

「どうした？」

「巨大な怪物が地底を襲ってるの！お空達が戦ってるけど、全然攻撃が効いてないみた
いで・・・」

ダークトラスターによる感知は間違っていないかったようだ。とにかく、正体を直接見
なければならぬ。

「こいし、そこまで連れていってくれ」

「妖怪だって苦戦してるのに、人間のザギお兄ちゃんには危ないよ？」

「大丈夫だ、問題ない」

地底怪獣グドンは、旧都で大暴れしていた。地底の妖怪達をその巨体で蹴散らし、両腕の鞭である振動触腕エクスカバーターを振り回して周囲の建物を瓦礫に変えていく。

「うにゆ、全然効いてない……」

さとのりのペットである地獄鴉、霊鳥路空は〈核融合を操る程度の能力〉で強力な熱線をグドンに放つが、全く効いていなかった。

それもその筈。グドンの身体を覆っている甲殻は頑丈であり、水爆でも傷を付けることは不可能なのだから。

「何て硬い奴だ……拳から流血しちまった」

旧都の妖怪達をまとめている鬼、星熊勇儀はお空が熱線を撃つ合間にグドンを殴っていたが、それも効果はなく、逆に拳から流血する。

その一方で、決断を迫られている者もいた。地霊殿の主であり、地底のトップともいえる古明地さとりだ。

地底で上位の戦力の2人があの巨大生物と戦っているが、お空の熱線すらも通用しな

い。お空が最大威力で放てば倒せるかもしれないが、その場合……

間違いなく、地底は消滅するだろう。要するに、地底ごとあの怪物を倒すということだ。しかし、地底は地上で嫌われた者達の唯一の居場所である。

簡単にそんな決断はできないのだけど、あれを倒さなければ地上にも被害が出る可能性がある。

この事態の始末について考え込む私だったが、それはとある一声で中断される。

「さとり、状況は？」

そう聞いてきたのは、地霊殿にいる筈のザギだった。

「ごめん、お姉ちゃん。ザギお兄ちゃんに行かないように言ったんだけど……」

「まあ、来てしまった以上は仕方ありません。それで質問の答えですが、状況は最悪です。最終手段として、地底ごとお空に吹き飛ばしてもらおうというものもあります……」

さとりの表情は、暗い。

「待て！もしもそんなことをしたら……」

「地底妖怪達の居場所が消えます。だから、最終手段なのです」

ザギは少し間をおいて言う。

「なあ、さとり。ここは俺に任せてくれ。俺なら奴を倒せる」

古明地姉妹の表情は驚きに変わる。

「まあ、見てな」

すると、ザギは黒い短剣のような道具を取り出し、横向きにして目前に構える。そして、鞘から本体を引き抜いた。

短剣の鞘で隠されていた部分が光り輝き、ザギの身体は青い光に包まれる。

そして、光の中から出現したのは……

「ザギさんが、巨人に？」

「お兄ちゃんが巨人になっちゃった！」

「うにゅ、なんかカッコいい」

「お、強そうな奴がきたね」

それは、黒いウルトラマンネクサスとも呼べる見た目のウルトラマンだった。

「ザギさん、これがあなたの力なのですね」

そして、ザギはグドンと対峙した。

地底にて対峙するザギとグドンの両者。お互いに睨み会うだけで硬直していたが、その状況はザギによつて崩される。

『かかって来いよ、怪獣』

ザギはまるでカンフー映画のように手招きをして、グドンを挑発。先ほどまで地底の住人から受けていた攻撃に加え、お腹が空いていたことでイライラしていたグドンは、簡単に挑発に乗った。

両手の鞭を地面に叩き付けながら向かってくるグドン。ザギに対して右腕の鞭を振るうが、跳んで回避されてしまい、逆に跳び蹴りを喰らった。

「ヴェアー！」

間髪入れずに距離を詰め、右ストレートを顔面に叩き込み、続けて左フックを横つ面に浴びせる。そして、両手で頭部を掴んで真正面から頭突きをお見舞いした。

頭突きによって脳震盪を起こしたグドンがふらついたのを見て、ザギはリアアットを命中させてグドンを地面に倒す。

「ヴェアー！ヴェアー！」

倒れたグドンに跨がったザギは、しばらく頭部を執拗に殴打。殴られ続けた頭部の甲殻にはヒビが入り、片方の角が半ばから折られていた。

しかし、グドンもやられっぱなしではない。角を折られたグドンは、鞭でザギの両腕を拘束すると、そのまま振り回して地面に叩き付ける。

「ヴェー!？」

『これは油断したな・・・』

地面に叩き付けられた後、立ち上がるザギ。そのまま背後に振り返るのだが、目の前にはグドンの鞭が迫っており……

迫っていた右腕の鞭はザギの首を締め上げる。そして、グドンはザギの腹部を蹴り上げつつ、空いている左腕の鞭を振るつた。

『チツ・・何か切断できる技はねえのか?』

すると、ザギの意思に答えるように右腕の手甲が青く輝き、ナイフのように鋭い刃が3つ付いたアームカッターへと変化した。

『これなら……!』

右のアームカッターを振り下ろし、首を締めている鞭を切断する。切断面からは血が吹き出し、グドンは絶叫した。

さらに左腕にも出現したカッターを振り下ろし、もう片方の鞭も切断。ザギは返り血

を浴びることになった。

攻撃は終わらない。武器を失ったグドンの胸部に強烈な前蹴りを当て、後方に大きく吹き飛ばす。すでに、ザギの両目は気分が昂ったことにより赤く染まっていた。

『これで終わりにする』

アームカッターを装備する右腕を胸部のエナジーコアに翳し、カッターに紅いエネルギーの刃を纏わせる。そして、ザギはグドンへ向けて走り出し、高く跳躍した。

「ヴェアアアアアアアアアア！」

グドンの頭上に至ったザギは、落下の勢いを利用してアームカッターをグドンの脳天に振り下ろす。

振り下ろされたエネルギーの刃はグドンの脳天から下半身まで通り、縦に真っ二つにする。さらに、地面にまで振り下ろしたカッターを回転して横に振ったことで、グド

ンは十字に切り裂かれてしまう。

相手をエネルギーを纏ったアームカッターで切り裂く技、バイオレンスカッティング
オリジナル技を喰らったグドンは、爆発を起こして木っ端微塵になった。

東方超越戦士 (改変前)

東方超越戦士 1話 (改変前)

「(ハ)は……?」

僕の名前は沢上光輝、普通の大学生だ。そして、目を覚ましたら何故か森の中で倒れていた。

「僕は……死んだはず……」

覚えていることといえば、僕はバイクに乗っていて事故に遭ったということくらいだ。別に信号無視をした訳ではない。交差点で信号が変わるのを待っていたら、パトカーに追われている暴走した車が突っ込んできて、僕の意識は彼方へと吹っ飛ばされた……はずだった。

心臓の鼓動も感じるし、体温もあるから、生きていることには間違いない。けど、疑問なのは森の中にいるということだ。さっきまでコンクリートジャングルとでも言うべき都会にいたはずなのに……

まさか、交通事故も含めて夢なのか?しかし、頬をつねったら痛かったため、現実の

ようだ。

現実ならば、どこかに人がいるはずだ。僕はおもむろに立ち上がると、歩き始めた。

「あ、あの……」

僕は二足歩行の獣に追い詰められていた。先ほど、人間らしき相手を見つけて声をかけたのだが、それは人の形に化けているだけの怪物であり、話を通じる相手ではなかったのだ。

獣に姿を変えたそいつは、鋭そうな爪のついている両腕を振り上げながらゆっくり近寄ってきており、僕のことを餌だと思っっているらしい。抵抗しようにも、僕は血が流れるような争いを知らない普通の大学生、勝ち目などない。

「痛っー」

無慈悲に振り下ろされた鋭い爪は、ヒュンという風切り音と共に僕へと向かい、肩から脇腹に続く3本の傷を作る。もし危険を感じて下がらなかつたら、僕は完全にバラバ

ラにされていただろう。

やがて、蹴り飛ばされて後ろの木に叩きつけられた。傷の通る場所を蹴られたのもあって、先ほど以上の苦痛だ。さらに、血の流出が激しくなる。

意識が朦朧としてきて、ぼやけた視界に映るのは僕を痛め付けた獣だけだ。そして、獣は倒れている僕にとどめを刺そうとして右腕を振り上げる。

「こんなところで……死んでたまるか！」

その時、不思議なことが起こった！

「えっ？」

突如として光輝の腰の辺りが眩しい光を放出し始めたのである。獣の方は、何か危険を察したのか後方へと大きく飛び退く。

光の放出が止まると、光輝の腰にはベルトが装着されていた。そして、彼には見覚えのあるベルトであった。

「これ、もしかして……仮面ライダーアギトの……？色は違うけど間違いない」
光輝は平成仮面ライダーのファンであったため、その正体に気付くことができたのだ。

腰に出現したのはオルタリングと呼ばれるベルトであり、光輝の腰に現れたものは彼の知っているような金色ではなく銀色の装飾が施されていた。

「使い方なら知ってる……変身！」

ベルトの両脇のスイッチを押し込むと、僕の身体は一瞬白い光に包まれた後、文字通りの変身を遂げる。そこには、銀の肉体と2本角を持つ赤い複眼の戦士が立っていた。

「本当に変身できた……！」

僕は、アギトに覚醒してしまったようだ。銀色の身体だから、名前はシルバーアギトとでもしておこうかな。

やがて、僕が動かないことに苛立ったのか獣が突進してくる。一方、僕は獣に向けて歩き始めた。

獣は右腕を左に大きく振り、シルバーアギトを輪切りにしようと試みる。しかし、アギトはそれをしゃがんで避け、逆ながら空きの腹部に右腕で正拳突きを叩き込む。

獣は怯むが、アギトはすかさず追撃として左、右、左と交互に腕を振るい、拳を浴びせる。しまいには横蹴りで獣を吹っ飛ばした。

（分かる、分かるぞ……！戦い方が！）

僕は直感で戦っているに過ぎないが、無駄の無い動きが出来ていた。これは、アギトに覚醒したことが原因なのだろうか？

やがて、脳内に再生されるビジョンがあった。シルバーアギトは、そのビジョンに従って動き出す。

アギトは銀色のクロスホーンを展開して2本角から6本角に変わる。

「はああ．．．．．！」

足元には銀のアギトの紋章が浮かび上がり、両腕を左右に広げる。続いて左脚を後ろに下げると紋章は両足に吸収された。

再び立ち上がって突進してくる獣。アギトは跳躍すると、キツクの体勢を形作って飛び蹴りを獣に浴びせた。

キツクを喰らった獣は大きく吹っ飛ばされ、立ち上がろうとした時に大爆発を起こした。

「勝った．．．．．」

シルバーアギトの変身は解除されて、元の光輝に戻る。そのまま歩きだそうとしたのだが、突然身体から力が抜けてうつ伏せに倒れる。

(ここで気を失うわけには．．．．．)

彼は意識を保とうとしたが、それも虚しく光輝の意識はそのまま闇へと落ちていった。

一方その頃、光輝の倒れている辺りに近づく人影があった。

「爆発音があったのはこの辺ね．．．上海、蓬萊、回りを調べて」

魔法の森に住む魔法使い、アリス・マーガトロイドは突然の爆発音を聞き、人形達と共にその調査に乗り出していった。

やがて、人形の1体である上海が大急ぎで戻ってきて、アリスに何かを訴えかける。「何か見つけたのね、案内して」

アリスは蓬萊の方も呼び戻した後、上海の後についていく。すると、上海が飛んでいる下に男が倒れているのを発見する。男を人形達に持ち上げさせると、それは青年だった。

「この服装、外来人？もしかして、爆発と関係あるのかしら？」

とにかく、彼を保護すべきだと考えたアリスは、光輝を自分の家に連れていった。